『山月記』小考

―その問題点と構造及び位置―

藤村　猛

始めに

『山月記』は発表以来、多くの論者によって評価されてきた。だが、この作品の主題や「変身」に関する主人公の告白を巡って、様々な説が存在しているのも事実である。本稿では、従来からの問題点である主人公の変身の理由や詩作の姿勢に関して私見を述べ、さらに、『山月記』の構造を手掛りとして作品を考察し、昭和十四～十六年の、いわゆる中期中島の文学活動と、当時の彼の作品群中における『山月記』の位置を明らかにしたい。

一

『山月記』は短篇であり、その構造もはっきりしている。主人公である李徴が虎に変身する前と後で、作品が二分できる。作品の重点は後者にあり、その大部分は李徴の哀惨への告白で占められている。李徴は挫折した詩人であり、虎に変身した人間である。それ故に、李徴の告白は詩業と変身に関して展開していると言って良い。

彼の告白の中で先ず目につくのは、人間が虎になる変身という事態である。考えるまでもなく、虎への変身は不合理の極みであって、変身の理由を説明する事は不可能である。それにも拘らず、李徴は理由を述べる。彼の述べた理由は三つある。簡単に言うと、(1)「さだめ」説、(2)「性情」説、(3)「非人間性」説である。(以下、理由(1)・(2)・(3)と呼ぶ。)

従来から、多くの論者はこの理由(2)・(3)の何れかに変身の理由を求めており、論争にもなっている。しかし、必ずしもそれらの理由が正当な変身の理由とてし当を得たものとは思えない。かと言って、変身そのものや李徴の言う変身の理由を妄想だと斥けるのも短絡思考である。変身という不合理はともかく、李徴が変身やその理由を受け入れる点に、そして、その理由を信じる点にこの作品の特徴がある。ここに彼の性格が、そしてそれがもたらした事態、拡大して言えば、彼の悲劇の一端が窺われるのである。又、確かに変身は不合理であるが、これぬきでは、彼の告白は独り善がりにすぎなくなる。彼の心情は変身による「出口なし」の状況設定によって、そのボルテージを高めている。変身によって、人間としての、詩人としての、家長としての生を彼は否定されたのである。これらの否定を強制され、それらの不幸に安住できない所から、告白は生じている。

だが、彼の告白は首尾一貫しているのではなく、互いに齟齬する点や事実と相違する点がある。それは変身の理由と、詩人として成功しなかった原因に関するものである。

一点目は変身の理由相互の齟齬である。李徴は初めに、「さだめ」という不可解事(理由(1))で変身を考えようとする。これには、変身という事実を認める「あきらめ」というべき性格がある。だが、「理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取って、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きものの「さだめだ。」(傍点は原文。以下も同じ)と思いつつも、理由(2)や(3)を考え出す。これらを彼は変身の理由として信じている。だが、「さだめ」を全的に信じているならば、他の理由は生じないだろう。しかも、理由(1)は「さだめ」に、理由(2)・(3)は自分に変身の責任を求めている点に違いがある。つまり、理由(1)と理由(2)・(3)は同じ種のものではない。

二点目の詩作に関する事実との相違は、変身の理由相互の齟齬よりもはっきりしている。李徴は言う、「才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭ふ怠惰」によって、詩人として成功できなかった、そして、才能にでは

なく努力に詩人としての成否がかかっていると。それでは、彼は自ら言うように詩作に努力しなかったのか。確かに、彼は師や詩友から遠ざかった。これは努力の放棄のように見える。しかし、彼は官吏をやめ、詩作に専念する為に山に閉じ込もったのである。それも悠々として暮らしたのではない。彼は詩作と生活の苦しみに耐えていたのである。その結果、「容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみ徒らに炯々として、會て進士に登第した頃の豐頬の美少年の俤は、何處に求めやうもない」程になる。これは「ひたすら詩作に耽った」結果でなくて何であろうか。たとえ一流の詩はできずとも、詩作の努力は認められよう、明らかに彼の言う原因は事実と食い違っている。

何故、これらの食い違いが生じたのか。李徴の思考のあいまいさか。それとも、作品のあいまいさか。換言すれば、作者がこの食い違いを作り出したのか、それとも、作者の意図とは別に生じたのかという事になる。これを考える為にも、変身と詩作に関する二つの疑問——何故、李徴は変身したのか、何故、詩業に挫折したのか——に対する本当の理由を考えてみる必要があろう。このうち、詩作に関しては真の理由が見つけられるだろうと思う。又、変身の理由の方も、李徴が理由としてどれを最も信じていたかを探る事はできよう。

二

李徴は三つの変身理由の内、どれを最も信じていたか。

告白の流れから考えると、一見、理由(2)のように思える。「分らぬ。全く何事も我々には判らぬ」とする「さだめ」説（理由(1)）から、「何故こんな運命になつたか判らぬと、先刻は言つたが、しかし、考へやうに依れば、思ひ當ることが全然ないでもない」として、「性情」説（理由(2)）を述べる。次の「非人間性」説（理由(3)）は自嘲的な調子で語られる。しかも、突発的で冷静に考えられた末のものではない。よって、理由(2)が最も重視されるべきもののように見える。だが、断定するまでには至らない。言うまでもなく、ここで問題とすべきは理由の正当性ではなく、李徴にとっての重さである。その重さを測る第一の方法として、理由を述べた後の李徴の態度を見てみる。

変身の理由と、それを述べた後の彼の態度を組み合わせてみると、次の事に気付く。(1)「さだめ」・(2)「性情」・(3)「非人間性」という変身の理由、これらは一見、独立しているようだが、実はそうではない。諦めようとする「さだめ」の後には死への不安が、猛獣だと言う「性情」の後には孤独の悲しみが、「非人間性」には自嘲と涙が伴っている。いずれの組み合わせも、相反するもの同志の組み合わせである。ここには李徴の、変身という事態やその理由への屈折した心情——信じる気持とそれに耐えられない気持——がある。こういう組み合わせによって、李徴の告白に迫力が生じているのは確かであるし、三つの理由のどれもが彼を苦しめているのが分る。つまり、李徴の述べる理由は結果的に嘆きを生み、不幸を実感させている訳である。

逆に言えば、嘆きの大小によって、変身の理由の李徴にとっての重さが分ろう。つまり、両者が相関関係にある点に着目して、どの嘆きが最も激しいかを見る事によって、李徴が最も信じている理由を割り出せようと思うのである。三つの中で理由(3)は、別れの直前で残り時間が少ないにしても、嘆きの場面がほとんどないし、直後には理由(1)・(2)の嘆きと比べると、冷静で理性的な袁慘への忠告がある。以上の事を考えると、理由(3)は、(1)や(2)よりも、李徴にとっては軽いものであったのではなかろうか。とすると、嘆きの場面が多い理由(1)と(2)に注目せざるを得ないだろう。これらの嘆きは深く重い。そして、質的にも量的にもほぼ同程度である。だが、これではまだ一つに絞り切れない。

第二の方法としては、今度は逆に、変身の理由を述べる前の、李徴の袁慘への依頼からそれが述べられた過程を考えてみたい。

理由(1)の前には「話を交して呉れ」という依頼が、理由(2)の前には詩業の伝録の依頼が、理由(3)の前には妻子の保護の依頼がある。この依頼の順序は彼の切望の強さの順と考えて良かろう。常識的には、妻子・詩業という順であろうが、李徴の場合は逆である。この順序の逆転に、李徴の詩への執着の深さが表れていると共に、その逆転が理由(3)を導き出している。つまり、妻子の依頼が詩業の依頼よりも後にある事によって、理由(3)を生じさせたのである。このように、妻子の依頼が理由(3)と関係している。

同様に、二番目の詩業の依頼が彼の詩業への執念の深さを告白させ、そしてその不振の原因の詮索に関連して、変身は性情によるという理由(2)を導き出したと考えて良かろう。これらの関係を理由(1)と一番目の依頼に当て嵌めてみると、第一に李徴が袁慘に話したのは、袁慘に問われた為でもあるが、変身の状況と変身に対する第一回答（理由(1)）である。そして、袁慘の問い——どうして変身したのか——に対する回答という点を重視すると、理由(1)こそが、李徴にとって公式的見解であり、変身の理由の中心となるべきものだと思われる。「考へやうに依

れば」と話し始める理由(2)や、自嘲気味に語る理由(3)よりも、李徴は理由(1)を最も信じていたようである。

だが、これは皮肉な事である。彼の求める理由が、結局「さだめ」という不可解事になり、変身の責任――一体、何が悪いのか――もあいまいになる。これでは、李徴は満足できなかったに違いない。彼は己れの運命の不条理を思い知らされるばかりである。

三

次きの疑問――何故、李徴が詩人として成功しなかったか――に移ろう。

彼の告白から先ず思いつくのは、李徴が詩人として、そして、人間として未熟であったという事である。つまり、彼の精神的な弱さである。主なものとしては、臆病な自尊心と尊大な羞恥心に振り回される弱さと、詩業の為に妻子を犠牲にできない弱さである。この二つの弱さは、一般的価値観からみれば別のものであるが、詩業にとって結果的には同じものだと言える。

前者の弱さは李徴を、彼の考える詩人と俗人の間を彷徨う中間人にさせる。この弱さには、詩人と俗人という区別を持つ人間観や、「賤吏に甘んずるを潔しとしな」い人生観が関連している。彼の目には詩業しかなく、その他のものは無きが如しであるが、彼は自分に自信を持ち得ないのである。後者の弱さは才能への絶望と共に、彼の詩作の続行を断念させ、彼を再び官吏にさせる。これには、他者の不幸に耐えられない弱さが、ひいては自己の不幸に耐えられない弱さが根底にあるのではないか。

前者の弱さには李徴も変身後には気付いている。性情に振り回される弱さを克服すれば良かったという悔いが、変身後の彼を苦しめている。これが彼をして努力不足と断ぜしめた理由であろう。もう一つの弱さについては、彼は気付いていない。反対に、妻子よりも詩業を重んじたと嘆いている(理由(3))。しかし、彼の言う非人間性も、妻子の為に詩作を捨てた点で中途半端にすぎなかったのである。

ともあれ、これらの弱さが詩業を挫折させたのである。こういう弱さを持っている詩人に一流の詩が作れようか。多分、作れはしないだろう。だが、詩業の失敗の理由は、はたしてこれだけだろうか。自己の弱さに彼が無抵抗であったとは思えない。彼は可能な限り抵抗したであろう。そして、自己の弱さとの闘いの中からでも、一流の詩が生まれてくる事もある。そこで視点を換えて注目したいのは、李徴の詩に対する袁慘の評である。

「長短凡そ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一讀して作者の才の非凡を思はせるものばかりである。しかし、袁慘は感嘆しながらも漠然と次の様に感じてゐた。成程、作者の素質が第一流に屬するものであることは疑ひない。しかし、この儘では、第一流の作品となるのには、何處か(非常に微妙な點に於て)缺ける所があるのではないか、と。」

何が欠如しているのかを袁慘は明らかにしていない。前述した李徴の精神的弱さが思い浮かぶが、それ以外に何が該当しようか。それを考える為に少し前に戻って、李徴の詩の特徴を見てみたい。「格調高雅、意趣卓逸」とある。これは奇妙な事ではなかろうか。李徴が袁慘に語った詩は、彼が自ら良しとする詩なのであろう。だが、それが彼自身や彼の生活と距離を持っているのである。

「己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによつて益、己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になつた。」、これが彼自身の言う自己の姿であり、「文名は容易に揚らず、生活は日を逐つて苦しくなる」、焦躁と貧困に苦しめられたのが彼の生活である。袁慘の評の「格調高雅、意趣卓逸」の状態とは異なる。つまり、彼の詩には彼や彼の生活が不在なのである。彼の詩が彼の心情や生活と離れていては、彼がかなりの想像力を持っていない限り、一流の詩はできないだろう。付言すれば、時代との遊離にも注目しても良いだろう。『山月記』の時代は「天宝末年」であり、歴史的には安史の乱の頃である。李徴の詩には時代の実情が反映していない。総括して言えば、彼の詩には彼の暗い心情や生活、そして時代が関与していないのである。

李徴が、何故、そういう種の詩を作ったのか。彼の詩に対する姿勢を、別の面から考える必要がある。彼にとって詩とは何であったのか。「詩家としての名を死後百年に遺さう」という野心の対象だけではあるまい。「作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂はせて迄自分が生涯それに執着した所のもの」なのである。この執着の強さや彼の詩の特徴、及び彼の性情を考えると、詩作は彼にとって生活の糧や野心の対象と言うよりも、むしろ、救済の性格を帯びていまいか。性情による苦しみや「己の傷つき易い内心を誰も理解して呉れな」いという孤独感から、詩に救済を求めたとしてもおかしくない。この希求が彼の詩を「格調高雅、意趣卓逸」にさせたのだろう。自分よりも一段高い境地に、彼が憧れたとしても不思議ではない。

創作を救済の道と見るのは、『山月記』と同じ中期の作品、『光と風と夢』の主人公のスティヴンスンと同じである。だが、スティヴンスンの執筆は創造であるのに対して、李徴の方は模倣に近いものである。両者の差は何か。先ず第一に、前出の作者の心情と作品の距離の差以外に、自己の弱さを克服する勇気と実績の差がある。これらには、想像力や表現それ自体のもたらす喜びの有無の差が関与してはいまいか。スティヴンスンやその他の中島の描く作家達に共通の「異常な想像力」や「表現する喜び」についての言及が、『山月記』にはないのである。李徴にはそれらがなかったようである。想像力のない者が空想の世界を作ろうとする。これではあまり実を結ばないだろう。この辺りにも、李徴の詩作方法の欠陥があるように思われる。

以上のように、李徴が詩作に努力しても、彼の性情に振り回される弱さや彼の作る詩と現実との遊離、そして想像力の欠如等により、彼には一流の詩はできない。しかも、詩作による充実感も喜びもなかったらしい。これでは不毛の作業にすぎない。そして、目標が遠ざかれば遠ざかる程、渇望の念も大きくなる。これは不幸な事である。つまり、詩業を自己の救済として執着した割には、空回りしたのである。先ず最初に自己の現実の姿や弱さを認め、それらを克服する必要性を痛感した時は既に遅い。

四

以上で、李徴の告白にあった二つの疑問について、ある程度解明し得たものと思う。ところで、李徴は告白内部の食い違いや本当の理由について、どこまで自覚していようか。これは、告白に食い違いが生じた理由とも関連している。

前述したように、李徴は程度の差はあれ、三つの変身の理由を信じている。変身の理由の多さは嘆きの大きさに比例するだろうが、何故、三つも信じているのか。基本的には、李徴にとって三つとも、変身の理由として信じるにたるものである為だが、次のようにも考えられないだろうか。理由(1)を全的に信じ切れない為に、理由(2)・(3)が生じたのではないか。そして、それらによって、自己処罰的に身を処して、変身という不幸に耐えようとした。つまり、変身の理由が分らないとする「さだめ」説では、自己の心情を抑え切れないのである。明確に変身を何者かの責任だとした方が、一時的にせよ、心が安定するのである。これは李徴の弱さでもあり、変身という事態の不条理の大きさでもあろう。とにかく、李徴は理由(2)・(3)で変身を自己の責任とする。この自虐の線上に李徴の告白はあると考えられる。

詩作に関しても同様であろう。自分が挫折した理由を明確に知っていなくとも、空費された過去や自分の残した詩業への思いが、彼には強すぎるのである。しかも、彼は変身後もできれば詩を作り発表したいと思っている。変身前は、詩作は己れの願望する世界の表現であった。が、変身後は、作中の即興の詩を見る限り、空想ではなく現実を表現しようとしている。その時、詩作は成功するだろうし、救済への道に通じてもいよう。だが、それも変身によって、その可能性を否定される。彼はその無念さを抑える為にも、自己の欠点（怠惰等）を強調したのではなかろうか。このように、告白内部の食い違いは、半分は李徴の意識的なものにより、半分は不可解さによって生じたものであろう。

自己の悪を認定する事によって、自己を抑えようとする。これは『李陵』の司馬遷と同じである。しかし、両者の差は大きい。司馬遷は自己を悪と認定し、書写機械と見做す事によって、自己を抑え新しい生に進んだ。しかし、李徴の方には一切の目的も喜びもない。だから、自虐的な悪の認定は、一旦は彼の動揺を抑えるにしても、結局は彼を傷つけ、彼の不幸を鮮明にするのである。

次に、『山月記』の李徴の悲劇の独自性を、なお一層明らかにするため、『山月記』とその原典と思われる『人虎伝』を比較してみる。

既に多くの論者によって指摘されているが、両作品の主要な差は、変身の理由と李徴の詩人としての境遇の差である。『人虎伝』では、李徴は過去に犯した殺人の罰として変身を捉えている。そして、彼は変身前に既に文人として名声を得ている。即ち、『山月記』の三つの変身理由と詩人としての挫折は、『山月記』に独自なものである。これが、『山月記』の特徴や作者の創作意図と大きく関わっているのは言うまでもないが、両作品の差は何を生じさせているのか。

変身の理由についての両作品の差は、李徴の変身による苦悩の大きさの差である。因果応報的なあきらめ（『人虎伝』）に対して、不条理の「さだめ」や自虐的と言って良い性情の分析、そして詩業への執念から生じる「非人間性」、これらによる苦悩が『山月記』には展開されている。又、詩人としての名声の有無の差は、李徴の挫折感の大小の差である。片や、既に名声を得た文人であり、片や、一流の詩が作れず挫折しながらも、詩業への飽くなき執念を抱き続ける詩人以前の詩人である。つまり、両作品の差は李徴の苦悩の大きさの差であり、それは作者の意識的操作によるものなのである。

以上の事から考えると、原典改変や前出の李徴の告白の食い違いは一つの方向を示している。即ち、李徴の悲劇の深化である。それでは、彼の悲劇の核は何か。彼の位置や状態、及び告白の食い違いの原因に注目したい。李徴は俗人と詩人の中間に、そして人間と虎との中間にいる。しかも、そうなった理由が彼には十分に分らない為に、自虐的に理由を考え出す。これが李徴である。一切の希望も救いもなく孤独と不可解を胸に、中間人として生きねばならないという不幸が、『山月記』の李徴の悲劇の核である。それを強制するのが李徴の性情であり変身である。しかも、それらは選択したものではなく、「押しつけられたもの」であった。

五

これまで述べてきたように、『山月記』の李徴は、虎に変身したという事だけでなく、その性情においても特異な存在である。特異ではあるが、従来より李徴を作者・中島と見做す考えがある。中島に近い人程、そう思っている。[1] その考えの根拠は、李徴の変身前の境遇と性格が『山月記』を執筆した頃の中島と似ている点にあるらしい。中島はその当時（昭和十四～十六年頃）作家以前の作家であり、持病の悪化により精神的にも経済的にも苦しい生活を送っていた。李徴の性格にも中島のそれと重なるもの（例えば、臆病な自尊心）[2] がある。そして、『山月記』は『古譚』の中でも、あるテーマの下の一作品ではありながらも、主人公が作者に近いという点で異色であるし、単なる怪奇譚と言うよりも人間心理の表現に重点がある。又、中島も自分と李徴との近さを意識しているらしい。[3]

とすると、中島は李徴に自分の姿を描き出したのか。そして、自分に近づける為に原典を改変したのか。だが、ここで李徴と中島が同一であると決定するのは早計である。『山月記』の周辺の作品や作家自身についてもっと検討する必要がある。それは同時に、『山月記』の創作の過程や意図を解明する事にもなる。

『山月記』の成立に関する資料はあまり多くない。昭和十四年頃（昭和十四年後半～十五年前半）に『山月記』を浄書したという中島の教え子の証言[4] と、作者自身の『山月記』関係と思われるメモ――「ノート第三」・「ノート第九」――ぐらいである。「ノート第三」には、「人虎伝」という『山月記』の原題が、他の『古譚』の作品名と一緒に列挙されており、その後に『文字禍』の草稿がある。「ノート第九」には、『光と風と夢』（昭和十五年の夏から冬にかけての執筆と推定される）のメモや、『山月記』に描かれた李徴の性情の原形らしきもの――自尊心・羞恥心――が載っている。この「ノート第九」の二つのメモが書かれた時期が問題になるが、前者のメモは昭和十五年の夏頃のものと推定できる。後者のメモについては、昭和十四年三月以降のものであるという程度しか明らかでない。[5] ただ、中島の他の「ノート」を見る限り、「ノート」内のメモは大体、近い時期に書かれているようである。であるから、二つのメモが近い時期に書かれたものと考えても良いのではなかろうか。よって、この二つのメモは昭和十五年の夏頃のものと考えておきたい。

又、もし教え子の証言が正しいとすると、『山月記』は遅くとも昭和十五年の前半までに完成している事になる。が、それでは「ノート第九」のメモと矛盾するし、昭和十六年より前に、何故他人に見せなかったのかという疑問――これは『悟浄歎異』の場合と同じである[6]――も生じる。そこで次のように考えておきたい。この証言で浄書したという『山月記』とは、現在の『山月記』の原形――「ノート第三」に記されている「人虎伝」よりも、恐らくはそれ以前の段階のもの――であろう。ただ、この証言により、中島が『山月記』の構想や執筆を昭和十四年頃には始めている事が分る。

次に、「ノート第三」のメモについて考えると、『古譚』の他の作品の執筆時期が問題となるが、『文字禍』が『光と風と夢』の後、昭和十六年の初めから六月までに成立したという説が[7] あり、それに従えば、「ノート第三」のメモは昭和十六年初め頃のものとなろう。又、『山月記』の題名が「人虎伝」とある点に注目すると、この時期にはまだ現在の『山月記』ではなく、草稿の段階であったのかもしれない。もしかすると、『山月記』は『文字禍』よりも遅い、つまり、『光と風と夢』よりも後に完成したのかもしれないが、断定するまでには至らない。ここで言えるのは、「ノート第九」の『山月記』と『光と風と夢』関係のメモの存在により、両作品が近い時期に構想され執筆されたのではないかという事である。

以上の事実や推測に則って、『山月記』の成立状況を想定してみる。

昭和十四年頃に『山月記』を浄書したという証言から、多分、この年あたりから中島は『人虎伝』に目をつけ、『人虎伝』の翻訳に近いものを執筆し始めたと想像される。[8] この当時、中島は私小説的作品に行き詰まり、作品の場を広げようとしていた。その一例として、この年の一月に『西遊記』に基づいた『悟浄歎異』を思いついている。この事からもこの頃、中国の怪奇小説の『人虎伝』に目をつけたとしても不思議はない。そして、昭和十五年の夏前後に「臆病な自尊心・

尊大な羞恥心」という性情が加わっていき――作品では変身の理由(2)として結実する――、『光と風と夢』の成立前後に、現在の『山月記』が成立したのだろう。

ここで視点を換えて、『山月記』の成立状況を探ってみよう。その方法として、中期の他の作品との関係、即ち、『山月記』が他の作品と色々な点で重なり合う所に注目する。主要なものは三点ある。

先ず最初は主人公・李徴の圧倒される運命と変身という怪奇性である。これらは『古譚』の他の作品や『古俗』と共通するものである。

次は主人公の自己分析を伴う孤独や不幸の実感である。これらは『悟浄歎異』や『悟浄出世』と共通する。

三番目は作家としての生き方――執筆よりも人間としての生き方を重視する倫理的なものと、一心に努力するべきだとする姿勢――で、『光と風と夢』と共通する。

無論、各作品にはこれ以外の特徴も、又、成立事情によっては二点以上を含むものもあるが、これらの三点から、この時期の中島の文学の特色――怪奇性・孤独感・倫理観――が分る。そして、これらの特色は不完全ながらも、李徴の考える変身の理由(1)・(2)・(3)と照応している。この照応によって、『山月記』の成立状況が想像できまいか。

つまり、変身の第一理由に第二理由が、そして、第三理由が付いている『山月記』の構造が、その成立の状況を暗示しているのではないか。最初に、『人虎伝』の怪奇性や圧倒される運命――これらは『古譚』全体に流れているテーマの一つ――があった。『古譚』や『古俗』の発想もこの頃（昭和十四年頃）であろう。次に（昭和十五年夏頃）、『悟浄歎異』に見られるような自己分析や孤独感が加わった。これらが理由(2)となる。そして、最後に（昭和十五年から十六年にかけての冬頃）、『光と風と夢』のスティヴンスンが持っているような倫理観が理由(3)を形成させたと想像できる。即ち、三段階の成立である。もちろん、この三者がきっちりとそのまま成立したのではなく、互いに影響し合い、他の作品の構想や執筆と共に形を成し、現在のようになったのであろう。

『山月記』の大部分を占める李徴の告白の構造は、相反するもの同志の三つの組み合わせによっており、しかも、それぞれが中島の中期の文学の特色を代表している。そして、それらが作品の成立状況を窺わせるのである。

六

次に、別の面から『山月記』を考えてみよう。

前述したように、『山月記』は『光と風と夢』とほぼ同じ頃の成立と推定した。この事は両作品の内容に、ある程度共通性を与えているものと想像される。執筆時期の近さにより、創作対象の好みや創作意図が似ている、つまり、両作品の間にはある特別な関係が存在しているのではないかと思われるのである。事実、『光と風と夢』も『山月記』も作家を主人公としており、彼らの倫理観も同じ種のものである。だが、彼らは似ていると言うよりは、むしろ似ていないと言った方が適切である。片や、成功した小説家であり、片や、挫折した詩人以前の詩人である。両者はそういう面で、対照的な存在と言って良いし、それ以外の違いについても前述した通りである。だが、対照的とはいえ、彼らはある線でつながっている。それは作者・中島を仲介とした線（関係）である。ここで前述した李徴の位置を思い出してもらいたい。詩人――李徴――俗人、人間――李徴――虎という関係である。これを応用してみると、スティヴンスン――中島――李徴という関係が成立する。

中島はスティヴンスンと李徴を、程度の差はあれ、自分に引き付けて造型している。李徴については前述した。スティヴンスンの方も、例えば、次のような妄想――「ひどい肺病やみで、氣ばかり強く、辛抱ならない自惚やで、氣障な見榮坊で、才能もないくせに一ばしの藝術家を氣取り、弱い身體を酷使しては、スタイルばかりで内容の無い駄作を書きまく」る「惨めな男の生涯の幻影」――は、中島の現実に近い妄想と考えて良く、その延長上に李徴がいる。三者は一直線上に位置している。何故、そんな事を中島はしたのか。

中島はそこで、一つの試みを果たそうとしたと思われる。つまり、成功した小説家と失敗した詩人を前に、自己の現在を明らかにして、未来を予測し、進み行く道を模索したのではないか。この時、李徴は中島にとって反面教師としての役割を持つのである。この「先取り」と言って良い試みの根底には、「教師をやめ、作家生活に入りたい」という中島の願望と、そして、何故良い作品が書けないのかという疑問があったろう。

中島は当時（昭和十五年頃）、作家になりたい、どうしてなれないのかと苦悩していたろうと思われる。そんな時、彼はスティヴンスンの精進ぶり――「唯一

筋の道を選んで、之に己の弱い身體と、短いであらう生命とを賭ける以外に、救ひのないことを、良く知つてゐ」る者の「修道僧の如き敬虔な精進」――に触れ、自分の弱さ――逃避的姿勢や自信のなさ――に気付いたろう。[9]そこで、中島は己れの弱さを李徴に与え、李徴を反面教師として造型しようとしたのであろう。そして、『山月記』における原典改変や告白内部の食い違いを考えると、中島は自分の弱さのみならず作家への執念をも、李徴に増幅して投影したと考えて良かろう。つまり、李徴の悲劇の深化――性情や詩業の挫折――は作者の創作であり、李徴は運命に圧倒される無力な人間（詩人）として、彼がもっていたであろう様々な可能性を奪取されたのである。その結果、中島は出口なしの人間（詩人）を造型する事によって、現在の自分の可能性を知り、勇気づけられると共に、自分が作り出した像に脅え始めたであろう。

何故ならば、中島はスティヴンスンよりも李徴に近いからである。中島は病気の悪化により逼迫し、出口なしの状況に進んでいく。挫折した李徴の姿が明日の自分の姿ではないと、誰が保証できようか。中島自身が一番恐れていよう。スティヴンスンは妄想を払拭できたが、中島にはできなかったに違いない。中島の頭の中で李徴像は現実化していく。

元々、中島は李徴の運命の怪奇さにひかれていた。（時期的には昭和十四年頃、作品では変身の理由(1)の部分に当たる。）やがて、自分に引き付け弱さを投影し、性情や詩業への執念を作り出した。（昭和十五年の夏から冬にかけての頃、作品では理由(2)の部分に当たる。）そして、スティヴンスンと同種の倫理観が加わる。（理由(3)の部分に当たる。これが李徴の悲劇の深化に一役買っているのは言うまでもない。又、中島にとって、これは家族を取るか、執筆生活を取るか、で悩む際、ある一定の効力を発揮したであろう。）

その結果、李徴は中島と等身大となり、一人歩きを始める。これが「先取り」の結果である。中島は『山月記』の世界から遠く離れようとしたに違いない。

中島は昭和十六年三月に教師をやめ、健康や生活の不安を感じながらも、作家として自立しようとする。それは、文学への執念や憧憬による自発的なものとはいえ、半面は病気によって今までの生活が送れなくなった為であり、彼のみならず家族をも巻き込む賭である。その賭には『山月記』の存在が影響していたであろう。が、彼はその賭によって、今までの閉塞状態から解放された喜びを持つ。[10]が、やがて、生活や将来への不安に耐えられず、又、家長としての義務感の為に、彼は南洋に活路を求めようとする。中島の心中には、生活を家族と共に楽しみたい、そして執筆生活を送りたいという二つの欲求があった。この欲求が南洋行によって否定された時、彼は『山月記』を思い出したであろう。その時から、『山月記』は身辺に迫る「いらだたしい悪夢」であったろう。つまり、南洋行は李徴の変身と同じ意味――出口なしの状況――を持ち始めたのではなかろうか。[11]中島は南洋での死を想像していた節がある。その意味で『山月記』は彼にとって、予言や遺言の性格さえ帯びてくる。しかし、作家以前の作品でありながらも、『山月記』は、作者の思いや極限状況における人間の悲劇を、ある素材を借りて見事に文学化した点で、『光と風と夢』と共に、作家へのスプリング・ボードであったと言えよう。

（昭和五十八年五月稿）

〔注〕

(1) 例えば中島たか氏の証言。「お礼にかへて」（『中島敦研究』　筑摩書房　昭53・12）

(2) 『過去帳』参照。

(3) (1)のたか氏の証言によると、中島は『山月記』に特別な感情を持っている。

(4) 鈴木美江子氏の証言。『写真資料・中島敦』（創林社　昭56・12）に紹介されている。

(5) 全集の解題によると、この「ノート」は「横濱高等女學校昭和十四年度入學考査問題」用紙で作られているという事である。

(6) 『悟浄歎異』の文末には「十四・一・十五」とあり、これが脱稿の日付と考えられてきたが、最近は疑問視されている。詳しくは、木村東吉氏の「『山月記』成立期考」（『国文学攷』82号　昭54・6）を参照されたい。

(7) (6)の木村氏の論文による。

(8) 『無題』や「断片十七・十八・十九」等をさす。

(9) 『過去帳』や友人達の証言（全集第二巻の解題に紹介されている第一次全集の第三巻の「編集後記」）等にみられる。

(10) 氷上英廣氏宛書簡（昭和十六年四月一日付）参照。

(11) 小宮山静氏宛書簡（昭和十六年六月十二日付、及び同年二十三日付）参照。

（付記）

本文の引用は『中島敦全集』（筑摩書房　昭51）による。